

## ◆ ニュースレター おおば ◆

平成28年4月号

## テーマ

## 『老後崩壊・「老人喰い」と若者』

○：現代思想（青土社）2月号で「老後崩壊」の特集をやっていた。「下流老人」を生み出す社会の貧困に抗して―藤田孝典・春日キスヨ、無届施設のリアルが投げかけるもの―天田城介、ひとり暮らし高齢者の貧困と社会的孤立―河合克義、「アカルイ老後生活」のための制度再設計は可能か―岩田正美、「下流老人」の中核としての貧困高齢女性―竹信三恵子、介護ビジネスが招いたツケにどう立ち向かうべきか―長岡美代、認知症の精神療法―北中淳子、障害者介護保障運動と高齢者介護の現状―渡邊琢、「わたしたち」が、「老後」を物語るために、「今」できることについて、考えてみた。―アサダワタル、等々、様々な視点から専門家が考察している。

○：その中で気になったのが、世代闘争へ？―生態社会学で考える高齢社会のゆくえ―と題する山下祐介氏の論文だ。高齢社会問題

とは、単に高齢者の数や比率が増えるのではなく、第一次ベビーブームで生まれた団塊の世代が、それ以前の世代と比べても、それ以後の世代と比べても、群を抜いて多いことに伴う問題である、という認識からスタートする。団塊の世代は、長男は親元に残り長子相続とセットで親世代を扶養し、次男以下は高度経済成長の中で自力で自分の生きる道を切り拓いてきた。家からも地域からも自由の中で、団塊世代自身の扶養をその下の世代に期待しないかわりに、老後も自分で自分の面倒をみることになる。「自分のことは自分で守る」が、社会として生活保護など様々なセーフティネットをしつかり用意し、お互い助け合いましたよ、になればいいのだが、むしろセーフティネットに引っかかることを回避しようと各自で自衛に専念する方向に進んでいる。自衛は、実際には「カネを貯め込む」とい

う形で追求される。本来、流出し、消費されて、世間に戻っていくはずの財が各自に隠匿されてしまう。これは続く世代にとっては苛立らしいことだ。

○：2000年代は、第二次ベビーブーム世代にとっては、家族形成期にあたる大事な時期だった。しかし子育ての終わった世代が自らの老後のために財を蓄え始め、経済の停滞が始まった。本来、財が滞らず市場に回わり、経済が健全である限り、将来展望にも期待を持ち、若い人々の結婚や子育てへの投資も生まれてくる。そうならなかった、この蓄財を、続く世代はどう感じるか。

○：「自分のことは自分で守る」一見、清潔な態度は、実際には「自分たちは自分たちでやるから、次世代は次世代で考えろ」であり、ある世代の自己保身が、次の世代の健全な再生産を破壊した、そう解釈される事態を引き起こした可

能性がある、と山下氏は指摘し、  
団塊ジュニア世代以降がこれから  
守ろうという高齢者はこうした  
人々であり、かなり厄介な事態だ  
という。今は団塊世代は健康であ  
り、財産も持っており、数も多い  
から世論でも選挙でも大勢を握り、  
世代闘争において優位にいる。し  
かし、人は必ず老いる。やがては  
若い人に権力を奪われる。抑えら  
れていた不満に火がついた時、世  
代闘争は顕在化する。

○：同時に2000年代は改革  
の時期でもあった。改革の思惑は  
どうあれ、既存の財や権益を守る  
ため、国家としての体制をこれま  
で通りに維持するため、現在の機  
構をスリム化し、その柱を維持す  
ることを優先する。そして新しく  
参入する若い世代には、これまで  
のようなことは認めない。時代は  
変わったのだから、生き方を変え  
てもらわなければならない。20  
00年代改革で達成しようとした

のは結局はそういうことだった、  
として山下氏はさらに論を進めて  
いる。

○：私も昭和24年生まれ、団  
塊世代の一員として考えさせられ  
る。財を蓄える状況には全くない  
が、今の世の中を見ると、我々は  
間違ったのか、精一杯生きてきた  
はずなのに、間違ったのか、間違  
ったとしたら、いつから間違っ  
てきたのか、それは修正できるのか、  
と思わざるを得ない。

○：現代思想の特集で、もうひ  
とつ気になったのが、鈴木大介―  
「与える世の中」をつくるために  
―。「オレオレ詐欺」とか「振り込  
め詐欺」とかに関わる若者達をは  
じめ裏社会・触法少年少女らの生  
きる現場を中心とした取材をする  
ルポライターの寄稿だ。

○：興味がわいて鈴木氏の著作  
「老人喰い―高齢者を狙う詐欺の  
正体」ちくま新書を読んだ。高齢  
者を騙すために高度に合理化され

た組織、ターゲットを見つける名  
簿や手順、高いモチベーションを  
植え付ける研修、プレイヤーと呼  
ばれる若者達の実像などなど、想  
像を超える現実を見せつけられる。  
被害の報道を見るたびに、これだ  
け注意するよう騒がれているのに  
何で引つかかるのだろう、とか、  
お金持ってる高齢者がいるんだ、  
とか思ってきたが、この本を読む  
と、これは無くならない、まだま  
だ続くと感じる。

○：もちろん犯罪であり、肯定  
できるものではないが、最貧困に  
あえぐ若者達を生み出しているの  
もこの社会だ。現代思想の鈴木氏  
の寄稿に戻るが、高齢者が「自分  
たちは汗水たらして働いて資産を  
作ってきたのだ」と主張しても、  
若者達は「僕らの世代は汗水たら  
して努力してもそんな資産形成を  
することはできない」と反駁し、  
「豊かな高齢者世代」に対しての  
怨嗟感情、そして明確な「被害者

感情」が見てとれるという。彼ら  
にも自らの祖父母らに対する敬老  
精神は感じられるのに、現在の日  
本で豊かさの大半を牛耳っている  
と思われる高齢者は全く別の存在  
として感じられているようだ、と  
いう。それはなぜか。昨今「格差  
社会」が進行していると言われる  
日本は、はるか昔から格差社会、  
むしろ階層社会、階級社会だった、  
ということだと鈴木氏は分析する。

○：「日本は不思議だ。僕の国  
なら不用意に大金を抱え込んでい  
る老人がいたら、殺して金を奪う  
かもしれない。でも中国では金を  
持った老人はみんな商売を始めて  
若者を使う。こき使うかもしれな  
いけど、少なくともお金を下の世  
代のために使う」と取材した不良  
中国人が言ったという。高齢者社  
会も格差社会であり、下流老人と  
呼ばれ将来不安の中にいる老人も  
多いが、若い世代には見えづらい。  
世代間格差と階級間格差は本来、

別のもののはずだが、それを混同し、境目すらつかなくなるほど、若い世代の閉塞感や将来への無力感は大い。

○：鈴木氏は、若い世代、子育て世代などに「与える世の中」にして行く。努力に応じて必ず報われる世の中にして行くことを最優先課題にすべきだと主張する。それが将来を委ねることになる世代全体(それこそ40代以上すべて)にやれる最善の「保険」であり、「将来投資」ひいては「自己防衛」ではないのか、と問いかける。

○：老後崩壊を問題にする時、老人を被害者として見がちだ。だが自分たちが作ってきた状況でもある。高齢者問題は日本だけの問題ではない。しかし日本がテストケースに見られている。それをモデルケースだと言えるように対処できるのだろうか。一人ひとりが持つ家族に対する愛情を、同じように若い世代へ、そして地域も、

国(政治家・官僚)も、同じように若い世代へ愛情をふりそそげば難しくはないはずだが…。